吉岡町指定重要文化財

森田家住宅（主屋・書院・長屋門）

指定年月日　令和元年五月三十日
場　　所　群馬県北群馬郡吉岡町大字上野田六七七番地

森田家概要

森田家は、伊香保街道の野田宿に約二千坪の敷地面積を有し、約四百年におよぶ歴史がある。江戸時代には大庄屋として重要な役職を務めるかたわら、酒造業や質屋また問屋・人馬継立所等を営み隆盛を極めた。さらに野田宿本陣としての役割も担っており、天保九年（一八三八）には細川豊前守母公が滞在している。

歴代当主は学問・芸術を重んじ、森田梅園は書家として、その長子森田梅子は狩野派の画家として名声を博した。その故をもって蘭医高野長英や画家渡辺崋山などそうそうたる文化人が訪れている。

天保五年（一八三四）、梅園・梅子父子は、村々の間で起こる水争いを治めるため私財を投じて野田用水（現在の明治用水）を完成させた。梅子の長子森田梅孫は、明治五年（一八七二）学制発布に当たりいち早く、上野田学校を開き子供たちの教育に尽力した。森田家は、明治期には林業・養蚕なども手がけ、代々地域の経済・産業・教育の振興に努め、吉岡町に貢献してきた名家である。

主屋

主屋は木造二階建、屋根は切妻造銅板瓦棒葺、外壁は白漆喰仕上と下見板張。規模は間口約二二m、奥行約一八mを測る。正面二階床を「出し梁造」、正面二階軒を「船枻造」とする。一階内部は土間と床上部にわかれ、玄関、土間、使用人部屋、御勝手、茶の間などが配置されている。

主屋は当初平屋建であり、土間と床上境の柱に手斧の痕跡、茶の間の敷居と鴨居の三本溝、大黒柱がないなど古い建築の特徴がみられ、江戸時代中期の築造と思われる。明治期には蚕室として二階を上げており、床は板張りとなっている。屋根裏三階は小屋組がキングポストトラスの大空間で、床はすのこ状になっている。改修をされているが、近代養蚕農家の発展過程を示す遺構としても貴重である。

書院

書院は主屋の南西にあり、玄関は主屋の縁側とつながっている。木造平屋建、屋根は寄棟造銅板瓦棒葺　外壁は白漆喰仕上、西側腰壁を下見板張とする。規模は間口約一一m、奥行約八mを測る。南の敷地を塀で囲い、池を備え庭を造る。

内部は八畳の上段の間と次の間、六畳の間と玄関を配する田の字形。上段の間の床の間脇天袋・地袋の襖絵に、狩野派「狩野了承」の銘がある。次の間の床の間の壁には、森田家が「オトメヌリ」と呼ぶ非常に珍しい左官仕上げを施す。着物に使われる柄を描いた型紙を壁にあて模様を作る技法である。型紙はその場で処分され、ほかで使用しないで「留め置く」ことから「オトメヌリ」と呼ぶようになったと伝わる。また、主屋より床面が高く接客用として格式高い建築様式をしている。

築造は、狩野了承（一七六八～一八四六）の銘や北側敷居が三本溝であることから江戸時代後期と思われる。

長屋門

長屋門は道路に面し、重厚で荘厳な建物である。木造二階建、屋根は反りを作り、入母屋造桟瓦葺、化粧垂木は漆喰を施す。外壁は腰壁を「海鼠壁」とし水切りを付け上部を漆喰仕上とする。規模は間口約二七m、奥行約六m、基礎から軒までの高さ約五mを測る。中央には欅の観音開きの大扉と脇に潜り戸が付く。現在の長屋門は大正時代後期の築造である。なお、旧長屋門は移築され現存している。

池泉回遊式庭園

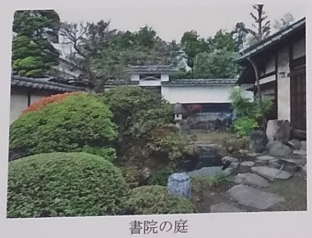
野田用水を引きこんだ曲線の外縁を持つ大きな二つの池があり、池には三つの島、二本の木橋、石橋、自然石で造られた小さな滝がある。周りには築山、東屋、手入れの行きとどいた植栽があり、榛名山を取りこんだ雄大な借景を有する庭園となっている。

森田梅園が遊学先の京都の名園を模して造営した江戸時代後期の姿を今も残し、規模・作庭の卓抜さ共に、個人所有の庭園としては県下に類を見ない名園である。森田家に滞在した歌人橋本直香は「後園十二景」にその見事さを詠んでいる。

令和元年十月三日
吉岡町教育委員会

現在の主屋と書院

書院上段の間


書院の庭

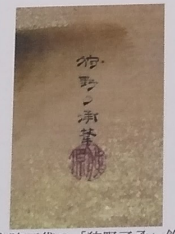
昭和初期の長屋門

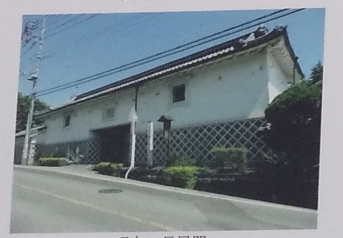
内側からの長屋門

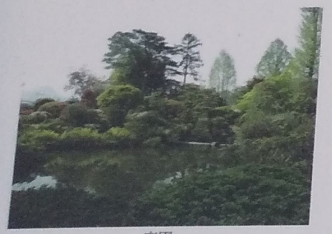
昭和初期の主屋（右側）と書院（左側）

主屋土間

書院次の間


書院天袋の「狩野了承」銘


現在の長屋門


庭園